



NewYork
Kaleidoscope



New York
Kaleidoscope

ニューヨークで見つけた、どこでもないどこか。

ニューヨークなのに、ニューヨークでない
ここであつて、ここでない

あなたなのに、あなたではない。

そんな現実と夢の間のような瞬間を
とらえたくて、でもとらえられなくて
あなたに触りたくて、でも触れなくて。

レンズ越しに、
恋するように、
あなたを追いかけます。

Milky way

ニューヨークでは、星はあまり見えないのです。

夜景という光の河が私たちの目を楽しませてくれますが、しんとした闇に輝く星たちはささやく言葉を持っていて、わたしたちの小さな頃の思い出を映画館で見る古いシネマのように思い起こさせてくれます。

わたしの生まれた岡山県の山あいの小さな村では星がよく見えました。

見上げた夏の夜空にかかった天の川。

空の端から端まで、シリウスのように輝く星の粒がびっしりと並んでいました。

わたしは天の川はそういうものなんだとずっと信じていて、ある日教科書で見たそれが砂金のよ
うに繊細な輝きの星の集まりだと知って、たいそう驚きました。夢だとは到底思えないあの天の
川の確かな現実感。

わたしはあの天の川を一体どこで見たのだろうか？？

何かの間違いだろうと思って、確認のために見上げた夜空には教科書と同じ天の川がさらさらと
流れていました。

あれは、ほんまに、夢やったの？？？

驚いて、お母さんにお話ししたら、大爆笑。

それは夢じゃろう。

夢じゃない、ほんまに見たんじゃもん。

覚えているもん、わたし、叫んだんだよ。すごい、すごい、きれいだって！！

家の前のこの広場で、向かいのお兄ちゃんがいて、愛宕山の頭の上から私の家の竹林の裏に伸び
るあの光の連なり、あれがただの夢であったとは！？

何度考えても納得ができず不思議でなりませんでした。

だから今でもわたしの天の川は、光の粒をキラキラさせながら。やっぱりわたしの中に枯れる事
なくあるのです。



Aquarium

真夜中の水族館をわたしは確かに失ったのです。

しんとしただっぴろい空間に、月明かりが西の大きな窓から差し込んできます。照らし出された影はこの世のものではないようで、はっと目を留めずに入られません。光はとても青くてまるで海の中にいるようで、幻想的で神秘的でした。

あのときわたしは、ある人に恋をしてそして執着して離れられずにいました。苦い思い出と、切ない思いと、もうすぐ失ってしまうであろうこの空間と繋がりと。これから起こる破壊がどんなものかなんともなく想像ができていたのに、わたしにはその流れをどうしようもなく止める事が出来ずに、ただこの美しい真夜中の水族館の静寂の中で、それを待っていました。何も失うものなんてないのに怯えていました。それと同時にころのどこかでも楽しんでいました。

ここに一人でいると、まるで現実の中にいるのか夢の中にいるのか分からなくなって、わたしは地上にいるのか、海の底にいるのかよく分からなくなって、ぽつんと宇宙空間に浮かんでいるかのような孤独に身を横たえました。

季節は6月。気温はだんだんと上がって来ています。わたしは近くのデリで買ったドイツのビールを飲みながら、ぼんやりと考えます。ついこの間ニューヨークから引っ越していった大切な大切な友人のこと。彼女は元気だって言うのに、しばらく落ち込んでしまってどうしてわたしはこんなにお別れが嫌いなんだろうと。さよならはだれだって好きではないけれども、それにしても、いつも受けるダメージが大きくて切なくて。

たぶんそれは、わたしに死を想像させるからなんだと、生きている植物の写し絵である影を眺めながら思いました。

私たちは失いながら生きている。そして、ビールをすべて飲み干すと。

朝がくればこの真夜中の水族館は、忽ち姿を消します。だれにも止めておく事は出来ないのです。そうして、いつしか忘れていく、こんな瞬間がここだけではなくてあちらこちらで起きていて、

だからこの失う直前の儂い美しさにわたしは酔いしれてしまうのかもしれない。



Angels

天使と言うのは羽が生えて、天上に住んでいる神のお使いの事だけではないでしょう。

わたしはこの夏、天使に会いました。

新しいロフトアパートメントに引っ越して初めて募集したルームメイトはイギリスから来たキューーナイラストレーター達でした。ニューヨークで活躍しているイラストレーターのインターンシップのために2ヶ月だけの滞在です。24歳のEくんと22歳のRくん。Eくんはこつこつと作り上げる努力型、Rくんは理解も回転も速いけど長続きしない天才型。2人のコンビネーションは完璧です。

一ヶ月前にインターネットにルームメイト募集の案内を出して、初めて彼らからメールを受け取ったときに、あ、この子達だと思いました。迷いもなく。今思えばとても不思議なのですが。

彼らの入居日がお互いの初対面で、顔も知らない訳で、時間だけ決めてアパートの前で待っていたら、わたしの名前を呼んで通りの向こうから彼らがかけてきました。

夏の日差しに透けて、わたしの目に、美しい羽が一瞬かれらの背中に見えました。

胸がキューンとなって、笑、兄弟でも恋人でも従兄弟でも甥でもないのに、一瞬にしてわたしは彼らの事を愛してしまいました。

それは無くしたピースをぱちっと止めるように鮮やかで。夏の日差しとうだるような暑さとともにわたしの中に刻まれました。

14歳も年が離れていてまだ若いから、彼らは恋に対してもとてもピュアで、イギリスの彼女の事を嬉しそうに話してくれました。

けれども8月の半ば、遠距離恋愛のすれ違いが原因でRくんが彼女と別れてしまいました。それと同時に、家族にも問題が発生して、みるみるうちに意気消沈していく彼。

なんとか励まそうと思って話を聞いていたら、感動するくらい素直。

ソウルメイトって知ってる？彼女は僕のソウルメイトなんだ。僕の居場所は彼女のところだけなんだ。彼女は僕のセーフティーポケットなんだよ。彼女はぼくのソウルメイトだって信じているんだ。

といって、あるクォーツを教えてくださいました。

それは。

If you love something, set it free. If it comes back to you, it's yours. If it doesn't, it never was. We do not possess anything in this world, least of all other people. We only imagine that we do. Our friends, our lovers, our spouses, even our children are not ours; they belong only to themselves. Possessive and controlling friendships and relationships can be as harmful as neglect.

もし今別れても彼女が運命の人ならば、僕はまた彼女に会えるはずなんだ。

このクォーツは恋人たちの間で有名なものですが、それは、それだけの意味に留まりません。執着の恐ろしさをこのクォーツは語っているのです。

それはまさにわたしへのメッセージでした。彼を通して。

イギリスに戻ったら、彼女と元通りだよ、何もかもうまくいくよ。もう少しの辛抱だよ。

そんな保障は誰にだってできないけれども、そう彼に言ってわたしが信じる事にしました。

英語が完璧に話せないわたしたちの会話は、決して十分な対話になっていなかったかもしれない

けれども、なにかこころが触れ合ったような気がして。

それは、引っ越しでぽっかりと空いてしまったわたしのこころをじんわりと癒してくれたのです

。



Peace

わたしの家にやってきた天使のようなイラストレーターの男の子達。（人間だけど、笑）

彼らに、一緒に絵を描こうって言って、真っ白のキャンバスを壁に貼っていました。

きっと人恋しかったんだと思う、わたし。

どうしても繋がりがかった人と、どうしても繋がれなくて。

裸のわたしで誰かと一緒に何かをしたかった、夢を時間を想いを、見えないものを共有したい
とっていました。

彼らはやろうやろうと言ってくれました。

でも、真っ白なキャンバスは忘れられたまま。

絵の具は、キャンバスの前に置かれたまま。

中学校のときの記憶が少しよみがえります。

苦しい想いを抱えていても、誰にも言えずに、笑顔で居なくては行けなかった、本当の友達にな
らずべて言う事が出来るのだろうか。

わたしにはそんな友達は、出来ませんでした。

それは自分に魅力がないからだと思っています。

わたしに魅力があれば、言葉の壁がなくなつて、繋がれるはずだと。

忘れられたキャンバスは、わたしの劣等感を刺激し、小さく無力感を感じていました。

ある日。

あれはどうしてそうなったのか、突然、彼らがキャンバスに絵を描き始めました。

真剣になった彼らに言葉はありません。

真っ白いキャンバスは、何もないわたしのところ、誰もいなかったわたしのところ。

彼らは、白いキャンバスを通してわたしに触ってきました。

言葉はいりませんでした。

無言のまま、あっという間に作品は出来上がっていきます。

わたしは夢中でシャッターを切ります。

キャンバスいっぱいピースサイン。

これ、きみの名前からとったんだよ。と。

わたしの名前からテーマを決めたと言いました。

胸がとても温かくなって、泣きそうになってしまって、ありがとうしか言えなくて。

たった2ヶ月しか彼らはいなかったけど、彼らのコラージュをわたしにくれました。

優しくしてくれてどうもありがとうって。胸が熱くなって言葉が出てきませんでした。

ピース。



Serendipity

デジャブ？去年と同じストーリーが繰り返されている。

6月にわたしが体験したのは、昨年の6月を思い起こさせる事ばかりでした。時がたち、同じ状況ではありませんでしたが、小さなパズルがそこここに散りばめられていました。

それは、わたしに、あの子ともう一度喧嘩してお別れする事になると予感させました。

ただの被害妄想だったのかもしれませんが。今度は、そうならないようにしようとなつたわたしは成長したからと、このテストを楽しんでもいました。でも、それは違う形で起こり、わたしの一番近くに居たあの子は、手の届かないところへ行ってしまうました。

わたしは、追いかけてませんでした。縁があれば、また仲直りするだろうと思っていました。少し落ち込んだりもしましたが、わたしにはやらなくてはいけない事があります。次の個展に向けて制作を始めました。

わたしのメディアは布に関する事すべてで、刺繍、染め、そして服作り。すべてはじめてで、独学で勉強しなければなりません。布の選び方、業者とのやり取り、服を作っていく過程、布に関するアイデア、知識。

もうあの子はわたしの問いに答えてはくれませんでした。わたしが困ったときにはすぐに教えてくれて、いつでも助けてくれていたのに。とうとう道が別れてしまったことを知りました。

わたしにずっとノーって言いたかったんだ。

それは口の中でざらりと苦みを残しましたが、ちょっと痛いけどでも清々しいような。だって、本当の事はときどき痛いけど、でも知らないより知っている方がわたしは心地いいから。

離れてしまった事よりも、あの子の気持ちの痛みが感じられて、手に取るようにあの子のころのシルエットが浮かんできました。

ブルックリンでの夏の夜は、比較的涼しくて爽やかな風が吹いています。

わたしはこの季節、毎日お気に入りの下駄を履いて、からんころんと音を立てながら近所を散歩します。どこに隠れていたんだろうか、冬には見かけなかった若い人たちがたくさん歩いています。ぐるっといつものコースを回った後に、ふとなぜか誘われて屋上に行きました。

扉を開けたら、マンハッタンから勢い良く流れてくるキラキラした羊雲たちがそらを駆けていました。大きな温かい何かに抱擁されたような気持ちになってころんと地上に身を横たえました。わたしの目に飛び込んでのは、うわっと迫ってくる銀色に光る桜吹雪のような雲たち。

何かがわたしの中で溶けていくのを感じました。

ああ。今なら分かる。

あの子はいっぱいわたしにくれたんだ、と。

わたしの今作っているものはすべてあの子から与えてもらったものだった。
布で色んなものを作るのは初めての事だったけど、わたしはあの子の側に居たから知ってた。

あの子、こんなにあたしにくれてた。

まるでさらさらと溶けた甘露のような甘美な酔いが、わたしの心から指先まで満たしていきま
した。

いつ会えるか分からないけれども、わたしがありがとうって思った事、あの子に届くと良くなっ
て思って目を閉じて、そして、目を開けたらもうあの美しい雲たちはどこにもなくて、灰色のど
んよりした雲が空には広がっていました。



Grace

わたしが大学四年生のときから一人暮らしを初めた平井アパート。
両親から、一人暮らしの援助を得られなかったため、どうしても、安いアパートを探す必要がありました。

そのアパートは、駅から徒歩15分、簡素な住宅街にあり、それなのにひと月なんと8500円でした。
古い共同住宅でしたが、女性ばかりであったため、安心して暮らせました。

そこで暮らし始めて、色んな事がありましたが、大学卒業後フリーターをしながら旅行に行こうと思っていたわたしも、25歳の時ついに就職する事を決意します。

一生働けるような技術を身につけるような仕事がしたいと考えたわたしは、システムエンジニアだと、思いました。
それまで、ワープロを打った事もなければ、パソコンに触った事もないアナログ人間なわたしでした。
大学の専攻は、マヤ文明好きが高じて、歴史。
数学が得意かと言われれば、嫌い。
そんなわたしが、です。決意したものの、自信がなかったのです。

半年間の職業訓練校が終わり、いよいよ就職活動と言う時。
フリーターしかした事のないわたし、もともと自分に自信のないわたし。
とにかく自信がありませんでした。

そんな時、平井アパートと一緒に住んでいたアフリカからボランティア活動を終えて帰って来たばかりの
お姉さんが、わたしの肩を押してくれました。

”出来ますよ。”

これこそ、わたしの欲しかった言葉でした。

”出来るに決まっています。”

ああだこうだと、不安を言っていて
もちろん一緒にわたしと悩んでくれる友達や家族はいました。
けれども。
欲しかったのは、この言葉でした。

大きな手がわたしの背中をそっと力強く押してくれたかのような、熱い血潮が身体の内側から湧き出てくるような感覚。

わたしは、肯定されている。わたしは、可能性がある。

この感動をわたしはまだ覚えています。
だから思うのです。この言葉を欲しい人が本当はいっぱいいるんじゃないかと。

もし、いま、あなたを通して、過去の私に会う時、わたしはあなたにこの言葉をあげたいのです。
。



Pilgrimage1

おじいちゃんが亡くなったのはわたしが20歳の時。

初めて体験する身内の死と言うものに、どのように向き合うかと、頭で考えようとしていた私は素直に泣く事が出来ませんでした。

それでも、おじいちゃんの事を忘れてしまう事が一番いけない事のような気がして、わたしは、おじいちゃんの骨をひとかけらこっそりと頂戴し、机の上において、それをどうしようかとずっと考えていました。

大学生の頃、わたしは山登りに夢中になっていました。アルバイトで稼いだお金をすべて登山用具と旅行代につぎ込みました。自分に対する自信と言うものを、何かする事と引き換えに得ようとしていたのでしょう、わたしの生きるプライドは、冒険家になる事（笑）でした。

大学四年間の中で一つの目標は、南アルプス全山縦走でした。光岳から鳳凰三山までの道のり。それは、2週間に及ぶ山行になります。

もちろん、女子大学だったわたしのサークルで、そんなハードな行程が許される訳がなくわたしは一人で行こうと考えていました。勇敢なように見えますが、一人で2週間もの間、つらい山行を乗り切れるのか、危険はないのかなど、不安は数限りなくわたしの胸に沸き起こってきます。

わたしは、迷っていました。

それはいつどうして、決意されたのか分かりませんが、わたしはあるとき、そのおじいちゃんの骨に約束しました。おじいちゃんと一緒に南アルプスを縦走すると。

そしてその頂きにおじいちゃんの骨を少しずつ遺していく事を。

わたしは誰に告げる事もなく、一人で準備をしました。言ったが最後、反対される事は目に見えていたからです。



Pilgrimage2

わたしが一人で登山に行くために心がけていた事は、出来るだけ準備をすると言う事です。

それで、何か起きたらもうしょうがないのです。

だから、本をいっぱい買って、全行程を把握して、スケジュールを立て、必要な荷物のリストアップ。

危険な箇所をピックアップしてそのシュミレーションのためにトレーニングをします。

幸い、南アルプスには、北アルプスのようなガレ場は少なく、体力があればいけるだろうということ。

問題は、特に南アルプスの塩見岳以南は人が少ないので、けがをしたり体力配分を間違えて動けなくなったら命取りです。

光岳の登山口まで林道が延々と延びており、車はいれませんが

わたしは、人間が一番怖いと思っているので、別の意味でこの林道は気をつけるように思いました。

女性ですしね。

それと同時に身体作りを初めて行きます。

今まで27キロを背負って歩いたのが最高だったのですが、

今回は2週間分の食料と予備の食料を背負いますから、35キロを目標値としてからだ作りをしました。

まず階段を上るトレーニングから初めて、2週間ほど経ったら、15キロの荷物を背負って階段に登る事を週2、3回繰り返します。これを2ヶ月。徐々にからだを慣らしていきます。

同時に筋トレは毎日やります。腹筋、背筋、腕立て伏せ50回ずつ。

それが終わったら今度は、15キロの荷物で週一回小さい山に行き、なるべく駆け足で登っております。

これを1ヶ月。

今度は2週間に一度、もう少し大きい山に日帰りです。

最初は20キロ、次は、25キロくらいにして登ります。

さらに1、2泊ほどの簡単な登山に行きます。

そして、最後に日帰りです35キロの荷物を背負って、登山に行き本番に行くのです。

だいたいこれに3、4ヶ月かかります。

緊張感がどんどんと高まっていきます。

登山工程表を、営林局などに送って自分のスケジュールを伝え、両親に工程表を残し

何かあったときに備えます。

それから、行程に必要なものを徐々に買いそろえて、ばてない程度に、食料を買いそろえてでもなるべく軽くして、、、頭を使います。

